

美祢ジオパーク構想 現地調査報告

日時：2013年8月5日(月)～8月6日(火)

現地調査員：佃 榮吉(日本ジオパーク委員会委員・産業技術総合研究所理事)

平田正礼(隠岐ジオパーク推進協議会事務局)

小池 温(南アルプス(中央構造線エリア)ジオパーク協議会事務局)

主な対応者(敬称略)：

村田弘司(美祢ジオパーク推進協議会会長・美祢市長)、林繁美(幹事長・副市長)、秋山哲朗(議長)

田辺剛(事務局長)、古屋壮之(事務局次長)、山縣智子(事務局員)、小原北士(事務局員・専門員)、竹田龍也(観光協会課長)、藤村龍夫(観光協会係長)、中嶋一彦(市地域情報課長)、山田豊正(市企画政策課長補佐)、阿武泰貴(市企画政策課主任)

配川武彦・永嶺克博(秋吉台地域エコツーリズム協会・インタープリター)、中屋弘幸(草原ふれあいプロジェクト・インタープリター)、池田善文(長登銅山文化交流館館長・インタープリター)、原川清史(秋吉台観光案内ボランティアの会会長)、末永悟朗(堅田地区まちづくり協議会副委員長)、山本富男(ボランティア森の子代表・エスコーター)、高橋文雄(市文化財保護課長・学芸員)、藤川将之(市文化財保護課係長・学芸員)、月成庄造(市学校教育課長)、

【調査場所】

8月5日(月)

(1) 美祢市役所(市長・議長・教育関係部署・事務局) 8:30-

(2) 秋吉台科学博物館(職員による案内)・秋吉台自然研究路散策(市民ガイド解説)10:40-

(3) 昼食(湧水を活用した料理・地域づくり団体の同席(懇談) 12:30-

別府弁天池(湧水関連 市民ガイドによる解説)・地域特産品を活用した体験教育活動団体

(4) 秋吉台上草原保全・活用活動(市民ガイド・保全活動団体) 14:00-

(5) 長登銅山跡・長登銅山文化交流館(館長による施設案内、懇談) 16:00-

8月6日(火)

(1) 美祢まるごと館・秋吉台観光交流センター・道の駅みとう 8:30-

(2) 歴史民俗資料館(職員案内・市民ガイド同席) 9:30-

(3) 大嶺炭田産業遺構(市民ガイド解説) 10:20-

(4) 美祢市役所(質疑・講評) 11:10-

【各項目のまとめ】

(1) ジオパークの名称とテーマ

山口県西部のほぼ中央に位置する美祢市は、石灰岩、大理石、無煙炭、銅などの地下資源に恵まれ、古くからこれらを利用することによって発展してきた。それぞれの歴史とそれに関わってきた人々のつながりに注目し、「“白”“黒”“赤”を巡る旅 ～大地の営みとその大地に支えられた人々の暮らし～」をテーマとしている。

古くから研究されてきた石灰岩地形の秋吉台や鍾乳洞(白)、近代日本を支えた無煙炭(黒)、奈良の大仏作成の銅資源を提供した長登銅山(赤)など、この地域の個性ともいえる“資源”を取り上げ、“色”で表現したメッセージ性を持ったジオパーク構想である。一方、1市2町の合併でできた美祢市の旧市町単位のそれぞれの特徴を“白”“黒”“赤”で表現しており、それらを一体のジオパークとして発信していくためには更なる工夫が必要。

(2) ジオサイトと保全

秋吉台エリア(東秋吉台)は国定公園・特別天然記念物に指定されておりその法律により保護されている。また、秋吉台の景観をつくる秋吉台山焼きは、多くの市民ボランティアの協力により、草原維持活動が継続されている。

加えて、秋吉台の地下水系はラムサール条約湿地にも指定されており、石灰岩地帯の生態系および水質保全についての具体的なガイドラインが設けられている。

セメント産業や大理石等嗜好用途の加工品販売が大々的に行われているが、それらの原材料は秋吉台と川を挟んだ隣のエリア(西秋吉台)で現在も行われており、ジオサイトには含めたら

れていない。“資源”をテーマにしたジオパークであり、ツアーで巡る場合に採石場がほぼ確実に目に入るため、現状の産業をどのように扱うか、今後の議論が必要である。

現時点ではジオポイントの洗い出し、ランク付けを行っており、今後の整備に対する検討を進めている。

ジオパークとしての整備は、秋吉台や秋芳洞などの観光地化されているジオサイトはアクセスや遊歩道等が整備されている。大嶺炭田跡など一部のジオサイトは民地内にありジオサイトとする場合周囲の整備が必要である。ジオパークとしての看板整備はこれからである。ただしそれぞれのエリアに既に看板があり、有効に活用し盤面等見直すことも必要である。この点については、既に現状把握までは行われているとのことであった。

秋吉台科学博物館や歴史民族資料館では、採集者を管理したうえで化石採集体験を行っている。秋吉台科学博物館では西秋吉台より岩石を持ち込んで行っており、歴史民俗資料館ではかつての石炭採掘地跡を採集場として整備している。

(3) 教育・研究活動

従来の地質資源を活用した観光やエコツーリズムのリソースをジオパークで活用する方向で進めている。秋吉台科学博物館や歴史民族資料館など、学芸員を配置する博物館を抱えており、組織として協力体制はとれている。なお、学術関係の連携に関して、ジオパーク推進協議会内に山口大学も参画しているが、ジオパーク推進のためのより積極的な連携体制の構築には至っていない。

学校教育では、小学校3～4年生が利用する副読本において、ジオパークについて触れられている。新任教員への研修として、4月に概要説明、5月フィールドワークを実施している。

秋吉台科学博物館の化石採集体験や、長登銅山文化交流館の鋳造体験など、修学旅行等の受け皿になっている。また、ジオパーク推進室で実施する“美祢検定”を準備中である。

(4) 管理組織、運営体制

事務局である美祢市ジオパーク推進室には、専任職員が3名(一般職2名、専門員1名)おり、その他観光部署や教育委員会等職員8名が推進室兼務になっており、マンパワーは確保されている。また、H26改定的美祢市総合計画後期計画にジオパークの推進を位置づける予定であり、美祢市総合観光振興計画(H23.3)、やまぐち産業戦略推進計画(H25.7)には既に位置づけられている。

推進協議会には、地元観光団体や活動団体、山口大学も参画しており、地域一体となってジオパークを推進する体制は確保されているが、具体的な連携はこれからである。また、H25総会で承認を受けた10年間の長期計画に基づき各種事業を進める予定である。

ジオパーク通信を月に1度発行しており、全戸配布し周知に努めている。ジオパーク構想のWebsiteは今年度整備予定である。

(5) 地域の持続的な発展とジオツーリズム、ガイド養成

H24は、市民を対象とした無料モニターツアーを計6回開催し述べ125人の参加を得ている。また、秋吉台地域エコツーリズム協会では、ジオサイトを含む24回のツーリズムを実施している。「みねジオガイド育成セミナー」6コースのうち、提案のあった4コースについてエコツーリズム協会(ジオパーク推進室事務局)実施のモデルツアーを行う。プロガイド、地域ガイド、市民ガイドの3つのレベルに応じたガイド養成を予定している。糸魚川、山陰海岸、室戸から講師を招き、先進地域から学ぶ取り組みを行っている。

ガイドマップをH25に作成予定である。ジオサイト説明板はH25に試験的に2基(万倉の大岩郷、白水の池)設置し、今後も優先順位をつけて整備する予定である。試金石として設置された現地看板は、現地看板なのに現物の写真を使い、版面の半分は文字という構成、日英併記だが内容は全く同じではない、地質年代が間違っている(万倉の大岩郷、白亜紀前期の年代値)などの粗が見える。今後は今年度採用された事務局の専門員である小原さんが担当されると聞いた。

地域の持続可能な発展のための地域資源を活かした商品開発の事例としては、石灰岩土壌で育てた梨、弁天池湧水で養殖したマス、ドリーネ畑で栽培したごぼうなど、ジオパークに関係する地域食材と料理はあるが、科学的根拠のあるストーリーと絡めての発信はこれからである。

(6) 拠点の整備

情報発信拠点としては、多数の駐車場とバスターミナルの併設された秋芳洞のターミナルに秋吉台観光交流センターならびに MINE まるごと館がある。このターミナルは地域内の観光者の導線の基点となっているため、とりあえず秋吉台に来た人に対する情報発信の場所となっている。その他の導線として、マイカーでの移動に関しては道の駅（みとう、おふく）、ならびに鉄道を用いた訪問者向けに JR 美祿駅（美祿線）を整備するとのことである。

一方、学術研究や科学の発信拠点となり得る文化施設については、旧町村（すなわち各色のエリア）にそれぞれ、白（旧秋芳町）-秋吉台科学博物館、黒（旧美祿市）-美祿市歴史民俗資料館、赤（旧美東町）-長登銅山文化交流館があるものの、前 2 館の展示老朽化が著しい。老朽化は展示方法や展示コンセプト、学術知見など様々な点に及んでいるが、予算的な問題もあって更新は難しいとのこと。長登銅山文化交流館は近年の新知見と新発見を元にした新進の歴史博物館であり、今後の成長が期待される。

（7） 国際対応

H 2 5 作成の Website は外国語対応も検討している。観光地である秋吉台には多言語対応の看板(国定公園の説明版)が設置されている。

台湾の地質公園（野柳地質公園）との協力関係を検討している。

（8） 防災・安全

毎年防災訓練実施しており、山口大学から講師を招いて防災教育もしている。ジオパーク推進協議会として今後連携を検討していく。